

赤穂郡上郡町

竹万山田遺跡

—(主)赤穂佐伯線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24(2012)年3月

兵庫県教育委員会

赤穂郡上郡町

竹万山田遺跡

—(主)赤穂佐伯線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24(2012)年3月

兵庫県教育委員会



調査地点遠景（北北西から）



調査区遠景（北から）



縄文土器 (報告 No.1)



縄文土器 (報告 No.4)

例 言

1. 本書は、赤穂郡上郡町に所在する、竹万山田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、（主）赤穂佐伯線道路改良事業に伴うものである。兵庫県西播磨県民局県土整備部上郡土木事務所(当時)の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成14年度に本発掘調査を実施した。
3. 遺構実測は、全体を1/50のスケールによる航空写真測量を伸栄開発（株）に委託して行い、一部の遺構・土層堆積等の実測については調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館嘱託員が行った。
4. 写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については（株）地域文化財研究所に委託した。
5. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(TP)を基とし、方位は国土地標V系の座標北を指す。
6. 本書の編集・執筆は、西口圭介・山本誠が行った。
7. 調査で出土した遺物・作成した写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館(兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号)において保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 確認調査の概要	2
第Ⅲ章 本発掘調査の概要	2
第1節 本発掘調査の概要	2
第2節 層序と遺構	2
第3節 遺物	4
第Ⅳ章 自然科学分析	6
第1節 竹万山田遺跡出土土器の胎土分析	6
第2節 竹万山田遺跡出土サスカイト製石器の産地推定	16
第Ⅴ章 まとめ	19

表目次

表1 遺物観察表	表4-2-1 分析対象一覧
表4-1-1 試料一覧および胎土分類結果	表4-2-2 原石採集地と判別群名称
表4-1-2 薄片観察結果(1)	表4-2-3 分析値および産地推定結果
表4-1-2 薄片観察結果(2)	

挿図目次

図4-1-1 (1) 各粒度階における鉱物・岩石 出現頻度	図4-1-3 砕屑物・基質・孔隙の割合
図4-1-2 (1) 胎土中の砂の粒径組成	図4-1-4 胎土薄片(1)
図4-1-1 (2) 各粒度階における鉱物・岩石 出現頻度	図4-1-5 胎土薄片(2)
図4-1-2 (2) 胎土中の砂の粒径組成	図4-2-1 サスカイト産地推定判別図(1)
	図4-2-2 サスカイト産地推定判別図(2)

図版目次

図版1 兵庫県・上郡町・竹万山田遺跡の位置	図版6 遺構図・断面図
図版2 竹万山田遺跡と周辺の遺跡	図版7 縄文時代の遺物1
図版3 事業計画地と調査位置	図版8 縄文時代の遺物2
図版4 確認調査トレンチ配置図	図版9 縄文時代の遺物3・その他の遺物
図版5 遺構全体図・東側壁面断面図	

写真図版目次

巻頭カラー 1	調査地点遠景（北北西から） 調査区遠景（北から）	写真図版 8	縄文時代流路（南から） SR01 堆積状況 北断面
巻頭カラー 2	縄文土器（報告No.1） 縄文土器（報告No.4）	写真図版 9	SR01 堆積状況 南断面 SR01 縄文土器出土状況1
写真図版 1	航空写真（上が北）		SR01 縄文土器出土状況2
写真図版 2	調査区遠景（北西から） 調査区遠景（北から）	写真図版 10	SR01 縄文土器出土状況3 調査区東壁 南半
写真図版 3	航空写真（上が北）		調査区東壁 中央の状況
写真図版 4	調査区遠景（北から） 調査区全景（北西から）	写真図版 11	調査区東壁 北半の状況 調査前の状況（北から）
写真図版 5	調査区全景（南南東から） 調査区全景（北から） 調査区全景 縄文流路周辺		機械掘削状況 遺構精査状況
写真図版 6	中央の柱穴群（西から） 南端の柱穴（北から） 柱穴群（南南西から） 柱穴群 近接（東から）	写真図版 12 写真図版 13 写真図版 14 写真図版 15	縄文時代の遺物 1 縄文時代の遺物 2 縄文時代の遺物 3 縄文時代の遺物 4
写真図版 7	SK01 SK01 堆積状況（西から） SK01 完掘状況（西から）	写真図版 16 写真図版 17	縄文時代の遺物 5 その他の遺物 1

第I章 はじめに

上郡町における近年の埋蔵文化財調査のうち、兵庫県立考古博物館が実施したものと、主要地方道姫路上郡線住宅地間連道路整備促進事業（以下、「促進事業」と略す。）がある。今回の本発掘調査に関わる事業は概ね、この「促進事業」に関わるものである。この「促進事業」に関連する調査の経緯については、平成20年度刊行『竹万宮ノ前遺跡』（兵庫県教育委員会 平成21年3月）、平成22年度刊行『山野里宿遺跡』（同 平成23年3月）、に詳しい。

竹万山田遺跡については、上郡土木事務所が進める（二）千種川河川改良事業に伴って平成13年度に兵庫県教育委員会が確認調査（2001205）を行い、遺構・遺物が確認された。

確認調査結果を受け、平成14年4月23日付け西播（上土）第168号による西播磨県民局県土整備部上郡土木事務所の調査依頼により（主）赤穂佐伯線道路改良事業に伴う本発掘調査を実施する運びとなった。調査の方法は 調査対象範囲の333㎡について水田耕土・近世以降の堆積土については機械力によって排除し、以下の堆積については人力によって掘削・精査を実施した。また、ヘリコプター使用による空中写真測量・撮影も実施した。

出土品整理作業は、平成23年3月14日付け 西播（光土）第1443号による西播磨県民局光都土木事務所からの依頼を受けて実施した。

確認調査（遺跡調査番号2001205）

平成13年12月4日～5日

調査面積：242㎡

旧：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現：兵庫県立考古博物館）

調査第4班 小川弦太

本発掘調査（遺跡調査番号2002080）

平成14年5月31日～6月27日

調査面積333㎡

旧：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現：兵庫県立考古博物館）

調査第2班 西口和彦・西口圭介

出土品整理作業

平成23年4月1日～平成24年3月31日

兵庫県立考古博物館

西口圭介・山本誠

西口由紀・小林陽子

嶺岡美見・吉村あけみ

岡田美穂・杉村明美・高橋朋子

古谷章子・有田遥香・河上智晴・坂東知奈

第Ⅱ章 確認調査の概要

確認調査対象範囲にトレンチ計14箇所設定した(図版4)。各トレンチの規模は2m×11mが1本、2m×10mが9本、2m×5mが4本である。それぞれのトレンチにおいて、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。今回の本発掘調査に関連して遺構が検出されたトレンチは旧ビニールハウス部分に設定されたトレンチ6である。トレンチ1～5・7～14は、トレンチ6より北側、安室川の間に設定されている。(トレンチ1・7は、図版4の範囲外である。)

トレンチ6からは、表土・耕作土の下に厚さ10cmの褐灰色細砂層、地表下30cm～60cmで浅黄色中砂混じりシルト層が出現する。この層上面から径25cmの柱穴を検出した。褐灰色細砂層からは平安時代の須恵器・瓦器が出土している。また、柱穴埋土には土器細片・炭化物が含まれている。更に下層、地表下60cmより下には小石を含む明黄褐色シルト層が堆積しており、湧水が見られた。トレンチ6は扇状地の微高地に位置すると考えられる。

トレンチ6以外のトレンチでは、トレンチ4・5・11・12からは地表下55cm～120cm下層から人頭大の礫を交えた砂礫層即ち旧中州が出現している。

また、トレンチ7・8・9・10・13・14では地表下約120cm付近まで近・現代の陶磁器が入っており、更に下層では青白シルト層が出現し、湧水が見られた。旧河道内にあたと判断された。

トレンチ1・2・3では表土あるいは旧耕作土の下層から灰色シルト層が出現しており旧低湿地にあたと判断された。

これらの調査ではトレンチ6以外からは遺構・遺物は検出されなかった。

以上、この確認調査の結果、トレンチ6より遺構・遺物を検出した。この地点は、他のトレンチより1mほど高い微高地にあたり、その他のトレンチは安室川と山田川の合流地点が形成する氾濫原に立地しているためと考えられる。

第Ⅲ章 本発掘調査の概要

第1節 本発掘調査の概要

調査区は、南辺約3m・北辺約14m・南北長約40.5mの矩形である。調査地点は山田川と安室川の合流点にあたり、遺構は、両河川の氾濫によって供給された礫及び礫面上の微起伏を埋積した洪水砂の直上から主に検出している。しかし、両河川の氾濫や、谷奥からの土砂の流入、後世の水田の造成などにより削平・攪乱を受けた部分が多く、遺物包含層が、被覆する部分は調査区中央の柱穴群が残る極僅かな部分であった。

第2節 層序と遺構

1. 層序(図版5)

東側壁面の土層断面図をあげた。土層の観察から、扇状地の凹凸が徐々に埋没して解消し、近世には平坦な地形へと変わっていった状況が読み取れる。

最下層には河川の氾濫によって供給された礫及び礫面上の微起伏(黄褐色礫層・灰褐色礫層・淡灰色

粗砂)があり、その上を被覆する灰褐色礫混じり細砂・黒褐色シルトが存在している。

縄文時代流路の西岸は礫層を層にして検出しているが、上層の灰褐色礫混じり細砂・黒褐色シルトを掘り込んで流れていたと考えられる。

縄文時代流路を被覆して第10層(淡灰色細砂)が堆積する。この層が柱穴・土坑の遺構面を構成しており、第10層の上に堆積する土壌化した第9層(淡灰褐色シルト質極細砂)が遺物包含層である。

第9層より上層では耕土と床土が交互に出現しており、これらは概ね近現代の耕作に伴うもので、東半では第9層を削平している。

2. 遺構

縄文時代後期の流路1本、古代末を中心とした時期の柱穴及びピット43個、土坑1基を検出した。

(1) 柱穴群 (図版5 写真図版6)

柱穴群は調査区中央部と南半部に集中して検出している。合わせて43個の柱穴あるいはピットを検出している。

柱穴及びピットの大半は調査区中央部に集中しており、掘立柱建物に伴う柱穴である可能性が高く、柱穴には、明瞭に柱痕を残すものもあるが、建物・杭列としては復元できなかった。

しかし、ほぼ南北方向に並ぶ柱穴や東西方向に並ぶ柱穴列が推測される部分があることから、本調査区内に正方位に軸をもつ建物が存在した可能性は高い。

柱穴・ピット群を被覆する埋土からは平安時代後期の遺物が出土しており、古代末の遺構と推定できる。

(2) 土坑

土坑1基を検出した。

SX01 (図版6 写真図版7)

検出状況 調査区北西端において検出された。柱穴群の北側に位置する。

形状・規模 やや不整な隅丸長方形を呈する。規模は東西辺約1.25m、南北幅約0.64m、深さ約30cm。細かく見れば、土坑西辺の幅は約60cm、東辺の幅は約54cmを測る。土坑の底部は平坦であり、南北の短辺近くに径20cm前後の石による集石が存在している。

出土遺物 須恵器碗破片(報告№27)が出土。

備考 集石は土坑の上層に集中しており、西辺が東辺に対してやや広い点や埋土から推して中世から近世にかけての土坑墓である可能性が高い。

(3) 縄文時代流路

SR-01 (図版5・6 写真図版8・9)

検出状況 調査区西壁中央から扇形に北方へ流れでる自然流路である。

形状・規模 南から北に流れる流路である。西壁での幅約1.4m・深さ30cm、北端における幅約6.0m・検出全長19mを測る。流路の断面形は皿状に近く、平面形状からみて流れは、やや西側へとカーブをみせている。

埋土 下層には灰黄色粗砂が堆積しており、中層には縄文土器を多量に含む茶灰～灰色中砂が堆積している。上層には黄灰色中砂が入っており、これは重複する新しい流路あるいは洪水に起因するものと考えられる。

出土遺物 縄文土器のほとんどはこの流路から出土している。

第3節 遺物

(1) 縄文土器 (図版7・8 写真図版12～16)

いずれも、緑帯文土器群に相当し、縄文時代後期初頭の四ッ池式および芥川式に属する。No24以外全てSR01から出土した。1～19・24は鉢の口縁部、20～23は鉢の胴部、25・26は底部である。

(2) その他の土器 (図版9 写真図版17)

27はSX01から出土した須恵器碗の胴部破片である。27以外は全て包含層からの出土である。28・29は弥生時代Ⅳ様式に属し28は広口壺口縁部、29は甕口縁部である。30～38は全て須恵器の破片である。

(3) 石器 (図版9 写真図版16)

3点の石器を図化した。全てササカイト製である。39は石鏃で包含層(調査区側溝)から出土した。40はスクレイパーで、SR-01から出土している。41もスクレイパーで、包含層出土である。

表1 遺物観察表

報告 番号	図版 番号	写真図版 番号	種別	器種	法量 (cm)			現存		
					口径	器高	底径	口縁	底	他
01	07	12	縄文土器	鉢(口縁部)	(29.5)	14.55+		1/4強		
02	07	12	縄文土器	鉢(口縁部)	(29.2)	10.0+		1/16程度		
03	07	12	縄文土器	鉢(口縁部)	(33.9)	6.7+		1/6弱		
04	07	12	縄文土器	鉢(口縁部)	(39.8)	11.2+		1/8強		
05	07	12	縄文土器	鉢(口縁部)	(27.9)	5.1+		1/8弱		
06	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)	(26.6)	10.0+		1/5強		
07	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)	(21.4)	5.3+		1/8弱		
08	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)		5.25+				突帯1/8強
09	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)	(24.3)	10.5+		1/18弱		
10	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)	(20.9)	8.75+		1/3弱		
11	07	13	縄文土器	鉢(口縁部)	(31.4)	10.25+		1/8強		
12	08	14	縄文土器	鉢(口縁部)	(26.0)	4.7+		1/6		
13	08	14	縄文土器	鉢(口縁部)		6.0+				
14	08	14	縄文土器	鉢(口縁部)		4.35+				
15	08	14	縄文土器	鉢(口縁部)	(14.6)	7.7+				
16	08	14	縄文土器	鉢(口縁部)		7.55+				
17	08	15	縄文土器	鉢(口縁部)		3.2+				突帯 残
18	08	15	縄文土器	鉢(口縁部)	(28.4)	7.8+		1/6弱		
19	08	15	縄文土器	鉢(口縁部)	(25.0)	11.5+		1/6強		
20	08	15	縄文土器	鉢(胴部)		7.0+				体部1/12強
21	08	15	縄文土器	鉢(胴部)		9.55+				体部1/6弱
22	08	15	縄文土器	鉢(胴部)		12.1+				体部1/12強
23	08	16	縄文土器	鉢(胴部)		18.8+				
24	08	16	縄文土器	鉢(口縁部)		6.5+				
25	08	16	縄文土器	鉢(底部)		1.75+	2.5		完存	
26	08	16	縄文土器	鉢(底部)		5.8+	10.3		完存	
27	09	17	須恵器	椀(胴部)		2.25+				体部極一部
28	09	17	弥生IV様式	広口壺(口縁部)	(28.5)	4.0+		1/4弱		
29	09	17	弥生IV様式	甕(口縁部)	(16.3)	5.8+		1/9弱		
30	09	17	須恵器	壺(口縁部)	(12.2)	1.1+		1/6弱		
31	09	17	須恵器	蓋(つまみ)		1.5+				天井部1/4弱
32	09	17	須恵器	蓋(口縁部)	(17.1)	2.55+		1/18弱		
33	09	17	須恵器	壺(口縁部)	(16.8)	4.3+		1/36		
34	09	17	須恵器	高杯(脚)		3.7+				脚柱部残
35	09	17	須恵器	皿C(高台)		1.55+	(5.5)		1/18	
36	09	17	須恵器	杯B(底部)		1.8+	(9.4)		1/8強	
37	09	17	須恵器	椀(底部)		2.9+	(4.6)		1/4強	
38	09	17	須恵器	椀(底部)		2.75+	(6.0)		1/4弱	
報告 番号	図版 番号	写真図版 番号	石材	器種	法量					
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ(g)		
39	09	16	サヌカイト	石鏝	13.5	14.3	3.1	0.5		
40	09	16	サヌカイト	スクレイパー	29.8	37.4	7.3	9.0		
41	09	16	サヌカイト	スクレイパー	49.0	36.2	4.7	8.3		

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 竹万山田遺跡出土土器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、上野郡に所在する竹万山田遺跡から出土した縄文土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。竹万山田遺跡は、播但山地西部を流れる千種川中流域の支流である安室川とさらに安室川の支流である山田川との合流点に位置する。調査地点から南東へ約1.5kmほどに安室川と千種川の合流点がある。

今回の試料では、それぞれ発掘調査所見により在地と搬入のいずれかの可能性が示されていることから、これらの所見と胎土との対応関係あるいは既存の地質資料から推定される地域性を検討する。

1 試料

試料は、竹万山田遺跡から出土した縄文時代後期の縄文土器片8点である。試料には、資料No.1～8までが付されている。これらのうち、資料No.1、4、7、8の4点は在地の可能性があるとされ、資料No.2、3、5、6の4点は搬入の可能性があるとされている。各試料の報告No.および在地・搬入の所見を一覧にして表4-1-1に示す。

表 4-1-1 試料一覧および胎土分類結果

資料No.	報告No.	種類	備考	鉱物・岩石				粒径組成						碎屑物				
				A 7	C 5	G 2	F 5	1	2	3	4	5	6	I	II	III		
1	6	縄文土器	在地?															
2	8	縄文土器	搬入?	■					■									■
3	13	縄文土器	搬入?															■
4	23	縄文土器	在地?															
5	21	縄文土器	搬入?															
6	15	縄文土器	搬入?															
7	1	縄文土器	在地?															
8	4	縄文土器	在地?															

2 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される。同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構

成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果

観察結果を表4-1-2、図4-1-1～3に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からN類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

資料No.1は、花崗岩類の岩石片が特に多いことから、C類に分類される。鉱物片では石英が多く、少量のカリ長石と斜長石を伴い、角閃石および黒雲母は微量、岩石片では、堆積岩類、凝灰岩または流紋岩・デイサイト、ホルンフェルス、変質岩、珪化岩など多種類の岩石片を伴う。このような特徴のC類は、これまでの分類におけるC5類に分類される。

資料No.2は、石英の鉱物片が多く、それ以外の鉱物片と岩石片はいずれも少量ずつ含まれる。鉱物片ではカリ長石と斜長石であり、角閃石と黒雲母も微量含まれる。岩石片では、花崗岩類のやや多い傾向が認められるが、堆積岩類や流紋岩・デイサイト、さらにはホルンフェルスや粘板岩などの変成岩類や変質岩、珪化岩も含まれる。これまでの分析例では、堆積岩類と流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類の3種がいずれも突出せずに含まれる組成をA類としており、かつ上述したような変成岩類や変質岩類も含まれる組成はA7類に分類される。

資料No.3は、流紋岩・デイサイトの岩石片を多く含むことが特徴である。流紋岩・デイサイトの卓越する組成は、G類としているが、これまでの分析例で認められたG類の組成は、斜長石の鉱物片も多量に含み、岩石片では安山岩が伴っていた。今回の資料No.3の組成は、斜長石の鉱物片が少量であること、岩石片では微量の堆積岩類と少量の凝灰岩、花崗岩類、変質岩、珪化岩および火山ガラスを伴うなどの特徴が認められ、これまでのG類とは区別する必要がある。したがって、資料No.3の組成は、G2類とする。

資料No.4～8は、凝灰岩を比較的多く含むことが特徴であると言える。凝灰岩を多く含む組成は、これまでの分類のF類に相当する。さらにこれら4点の資料は、鉱物片では石英が比較的多く、岩石片では、凝灰岩以外に堆積岩類、流紋岩・デイサイト、花崗岩類、変質岩および珪化岩という多種類の岩石片を少量含む。このような特徴のF類は、これまで分類では、F5類に分類される。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に1類から6類までの分類を設定した。各分類の内容とそれに分類される試料を以下に示す。

- 1類：粗粒砂をモードとし、次いで極粗粒砂が多い。資料No.8。
- 2類：粗粒砂をモードとし、次いで中粒砂が多い。資料No.2、3、7。
- 3類：粗粒砂をモードとし、次いで細粒砂が多い。資料No.5。
- 4類：中粒砂をモードとし、次いで粗粒砂が多く、その次に極粗粒砂が多い。資料No.4。

5類：中粒砂をモードとし、次いで粗粒砂が多く、その次に細粒砂が多い。資料No.1。

6類：中粒砂をモードとし、次いで細粒砂が多い。資料No.6。

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が15%未満、15～20%と20～25%で3分することができ、順にⅠ類～Ⅲ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類：資料No.5

Ⅱ類：資料No.3、4、7、8

Ⅲ類：資料No.1、2、6

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表1に併記する。

4 考察

(1) 胎土の鉱物・岩石組成と竹万山田遺跡の地質学的背景

今回の試料は、胎土に計4種類の鉱物・岩石組成が確認されたことから、少なくとも4箇所の地質学的背景の異なる場所で採取された材料で作られた土器が混在していると考えられる。ただし、4種類の鉱物・岩石組成の違いは、突出して多い岩石の種類が異なることによるものであり、出現する鉱物および岩石の種類は、全試料には共通していることが指摘される。すなわち、鉱物片では石英が多く、カリ長石と斜長石を伴い、微量の角閃石と黒雲母が含まれ、岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類、変質岩、珪化岩の各岩石片がほぼ全ての試料に含まれている。さらに、C5類の資料No.1とA7類の資料No.2には共通してホルンフェルスが少量含まれ、F5類の資料No.8には、極めて微量ではあるが、C5類の資料No.1に含まれる閃緑岩・はんれい岩とA7類の資料No.2に含まれる粘板岩が含まれている。このような鉱物・岩石組成の関係から、今回の試料はいずれも、広域的にみれば共通する地質学的背景の中にあつて、局所的に地質の異なる場所で作られたことを示唆している可能性があると考えられる。

発掘調査所見では、在地とされる試料もあることから、まず竹万山田遺跡の位置する千種川流域から上流域の地質と胎土の鉱物・岩石組成を比較してみたい。この地域の地質については、猪木・弘原海(1980)に詳しい。上部町竹万付近の千種川に鞍居川や安室川が合流する付近の流域に分布する山地を構成する地質は、白亜紀の流紋岩質溶岩や同質溶結凝灰岩および火砕岩などを主体とする上部累層や鶴亀累層であり、これらは兵庫県南部に広く分布する相生層群の一部である。また、支流の安室川の両岸に分布する山地も同様に上部累層および鶴亀累層により構成されている。その中であつて、JR山陽本線土郡駅の南側、安室川右岸に迫っている山地には、古第三紀に貫入した花崗斑岩・文象斑岩の岩体が分布し、安室川支流の山田川の両岸の山地斜面には石英閃緑岩の岩体が分布している。さらに安室川との合流点よりも下流の千種川の両岸の山地は、同様に古第三紀に貫入した花崗閃緑岩により構成されている。なお、これらの花崗岩類の岩体の周縁にはホルンフェルスが形成されている。一方、白旗山や愛宕山より北側の千種川上流域には、相生層群に相当する地質は分布せず、代わりに砂岩やチャートなどの堆積岩類および千枚岩質粘板岩からなる古生代石炭紀の上月層や三日月層、および変質れい岩類などを主体とする夜久野型複合岩体が分布している。以上述べた地質記載から、竹万山田遺跡付近の千種川の沖積低地を構成する堆積物には、上述した全ての地質に由来する岩石片が混在していることが推定される。同時に、その種類構成は、今回の試料の胎土に認められた岩石の種類構成ともほぼ一致する。したがつ

て、今回の試料とされた縄文土器は、いずれも相生層群相当の地質が分布する白旗山と愛宕山より下流側の千種川流域の堆積物を材料として作られた可能性が高いと考えられる。

次に、各分類に対応する局所的な地質について検討してみる。分類のうち、花崗岩類の卓越するC5類は、上述した地質の中では、吉第三紀に貫入した花崗岩類の岩体周縁の堆積物に由来すると考えられる。特に、今回のC5類である資料No.1の花崗岩類には微文象組織が明瞭に確認されていることから、資料No.1の土器は、竹万山田遺跡から至近の、JR上郡駅南側の安室川右岸に迫る花崗斑岩・文象斑岩の岩体周縁の堆積物を材料としている可能性が高いと考えられる。A7類の資料No.2については、花崗岩類の岩石片の割合が突出していることもないので、上述した資料No.1とは異なる場所で採取された堆積物を材料としていると考えられる。周辺における花崗岩類の分布からは、花崗閃緑岩が両岸に分布する安室川と千種川の合流点付近の場所を推定することができる。

G2類の流紋岩・デイサイトおよびF5類の凝灰岩は、ともに相生層群相当の地質に由来することは確実であることから、資料No.3～8までの土器は、相生層群が分布する白旗山と愛宕山より下流側の千種川流域の堆積物が使用されていると考えられるが、現時点では、それ以上の局所的な場所を特定することはできない。少なくとも、上述した花崗岩類の岩体の分布する周縁地域ではないと考えられるから、安室川と千種川の合流点よりも上流側の流域という可能性はある。

(2) 発掘調査所見と胎土との対応

発掘調査所見で示されている「在地」と「搬入」が示す具体的な範囲や地域は不明であるが、考古学における土器研究の見地からの分類として、胎土による分類との対応関係は確認する必要がある。

鉱物・岩石組成との対応では、在地?とされた試料4点のうち、1点がC5類、他の3点はF5類であった。一方、搬入?とされた試料4点のうち、2点はF5類であったが、他はA7類とG2類が1点ずつであった。前述したように、鉱物・岩石組成から推定される胎土の地域性については、C5類以外は局所的な特定はできないため、上述の対応関係についても、その評価は今後の分析例の蓄積を待たなければならない。ただし、C5類の試料について在地の可能性が示されていることに、今回の胎土分類との整合性をみることができる。

粒径組成については、粗粒傾向の強い組成をI・2類、中間的な3・4類、細粒傾向の強い5・6類という見方をすると、粗粒傾向の組成に在地?と搬入?が2点ずつ、中間的および細粒傾向の組成に在地?も搬入?もそれぞれ1点ずつに分かれる。すなわち、在地?と搬入?とでは、両者同様の粒径組成分類となった。ただし、上述した鉱物・岩石組成を合わせてみると、F5類の在地?の試料は、粗粒傾向の組成と中間的な組成とに分かれるが、C5類の在地?の試料は細粒傾向の組成を示す。これに対して、F5類の搬入?の試料は、中間的な組成と細粒傾向の組成とに別れ、A7類およびG2類の搬入?の試料は、ともに粗粒傾向の組成を示している。

碎屑物の割合との関係でも、鉱物・岩石組成を合わせてみると、以下のような関係を見出すことができる。F5類の在地?の3点は、いずれもⅡ類であり、F5類の搬入?の2点は、Ⅰ類とⅢ類に分かれ、Ⅱ類はない。また、C5類の在地?はⅢ類に分類され、A7類の搬入?も同様にⅢ類に分類される。一方で、G2類の搬入?は、F5類の搬入?にはなかったⅡ類に分類される。

以上述べたように、粒径組成および碎屑物の割合と発掘調査所見との対応関係は、鉱物・岩石組成を組み合わせることで、相関性が見出せる可能性があると考えられる。今後は、「在地」と「搬入」の地理的な範囲を設定し、その範囲に応じた出土地の試料を多数分析することができれば、千種川流域にお

ける縄文土器の移動に関わる手がかりを得られるものと期待される。

引用文献

猪木幸男・弘原海清,1980,上郡地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅)地質調査所,74p.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－,日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

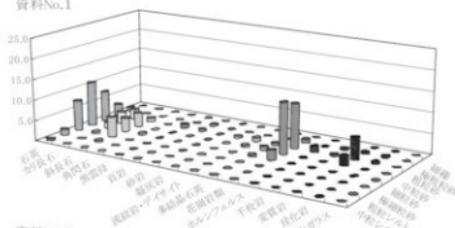
表 4-1-2 薄片観察結果 (1)

資料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計								
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	凝灰岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	岩石片 四稜岩・はんれい岩		ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	頁岩	珪化岩	火山ガラス	その他 植物片	植物球形体
1	細粒																							0
	極粗粒砂	2							1					2			1				1	1		8
	粗粒砂	6	5	2		2			1		1	2	1	22	1	3	1				11	1		39
	中粒砂	15	6	7									1	2	25						5			61
	細粒砂	22	3	7	1								1	5										39
	極細粒砂	15	1	10		2																		28
	粗粒シルト	3		1																				4
	中粒シルト	1																						1
	基質																						702	
	孔隙																						33	
備考	基質は黒雲母質、頁岩質、緑簾などを伴う火山岩由来の頁岩や、風化岩、花崗岩類には微文象組織が認められる。																							
2	細粒																					1	1	
	極粗粒砂	6	3									1	2		2		1	1				1	16	
	粗粒砂	23	8	5					1	2			3	7	1	3							53	
	中粒砂	17	6	2	1	1	1	1	1		2	2	6		2					1			43	
	細粒砂	29	3	8		1							1										33	
	極細粒砂	9	3	1																			13	
	粗粒シルト			2																			2	
	中粒シルト																						0	
	基質																						542	
	孔隙																						39	
備考	基質は雲母質、粘板岩は珪質粘板岩。																							
3	細粒																						0	
	極粗粒砂										1	3											4	
	粗粒砂	3	1						1	2	10		3							3	1		24	
	中粒砂	1	2								1	3	5	2							1	2	19	
	細粒砂	7	1	1									1							1		1	12	
	極細粒砂	8	1	1																	1		11	
	粗粒シルト	6		2																			8	
	中粒シルト																						0	
	基質																						400	
	孔隙																						2	
備考	基質は雲母質、凝灰岩・凝灰岩は結晶質で、試料表面付近が淡褐色を呈し、内部は褐色を示す。																							
4	細粒																						0	
	極粗粒砂	4							5	5	2		2							3			21	
	粗粒砂	3							1	4	12	2	2							4			28	
	中粒砂	5	3	2		1					12	1	2	2							2		30	
	細粒砂	1	2						1	2													6	
	極細粒砂																						0	
	粗粒シルト	2		5																			7	
	中粒シルト			1																			1	
	基質																						382	
	孔隙																						25	
備考	基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示す、角閃石は弱酸化、凝灰岩・凝灰岩は結晶質、頁岩質は火山岩の風化岩など。																							

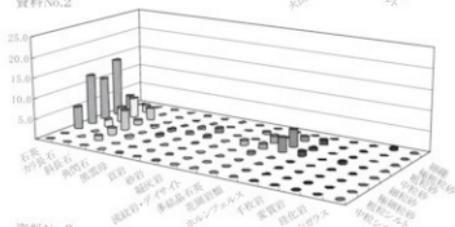
表 4-1-2 薄片観察結果 (2)

資料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成															合 計								
		鉱物片					岩石片					その他													
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑泥石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩・はんれい岩		千枚岩	粘板岩	黒石英	雲母岩	珪化岩	火山ガラス	その他 植物片	植物 埋立体
5	細 礫																								0
	極粗粒砂										1	1													2
	粗 粒 砂	4		1						3	15	4								1	1				29
	中 粒 砂	3			1					3	4		1	1									1		14
	細 粒 砂	9		2						1	1	1	1									1			16
	極細粒砂	4		4										1											8
	粗粒シルト																								0
	中粒シルト																								0
	基 質																							469	
	孔 隙																							23	
備 考	基質は雲母粘土鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は結晶質。植物片は試料表面の褐色部に分布する。																								
6	細 礫																								0
	極粗粒砂										1	1													2
	粗 粒 砂	4		1							5	1		5							2				18
	中 粒 砂	18	3						1	4	21	4	6								1				58
	細 粒 砂	13	2	5	1	1				3	8		1	2											36
	極細粒砂	6		2																					8
	粗粒シルト	5		2																					7
	中粒シルト																								0
	基 質																							433	
	孔 隙																							10	
備 考	基質はシルト質で、雲母鉱物が散在する。流紋岩・凝灰岩は結晶質。珪化岩は、頁岩・凝灰岩が原岩とみられる。																								
7	細 礫																								0
	極粗粒砂	2									5	1	2	1											11
	粗 粒 砂	16	2							1	1	6	2	1	2						2		1		34
	中 粒 砂	13	1								6	1													21
	細 粒 砂	1		1	1						3														6
	極細粒砂	1																							1
	粗粒シルト			2																					2
	中粒シルト																								0
	基 質																							323	
	孔 隙																							8	
備 考	基質は雲母粘土鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩・流紋岩は結晶質。珪化岩は凝灰岩が原岩とみられる。																								
8	細 礫																								0
	極粗粒砂	3								1		2	1	1							2	3			13
	粗 粒 砂	7	4							6	3	9	4	1	5	2				1		2	5		49
	中 粒 砂	1		2						3												2			6
	細 粒 砂	1		2	1						1	2	1												8
	極細粒砂	3	1	1						1		1	1												8
	粗粒シルト	3		1																				1	5
	中粒シルト	1																							1
	基 質																							411	
	孔 隙																							14	
備 考	基質は雲母粘土鉱物質であるが、有機物が多い。試料内部は有機物が多く、黒褐色を呈するのに対し、試料表面部は有機物が少なく、淡褐色を示す。凝灰岩・流紋岩は結晶質で珪化が進んでいる。珪化岩は凝灰岩・流紋岩が原岩とみられる。																								

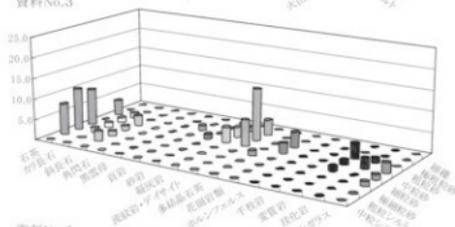
資料No.1



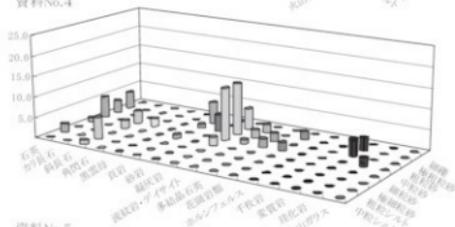
資料No.2



資料No.3



資料No.4



資料No.5

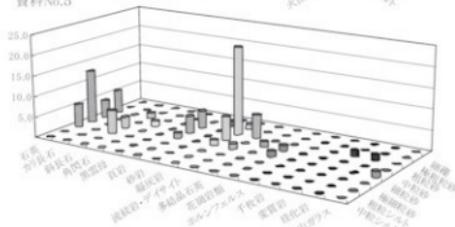
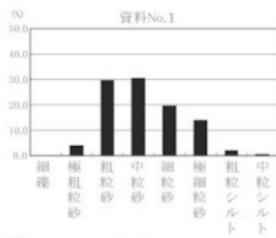
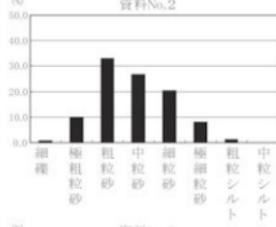


図4-1-1(1) 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

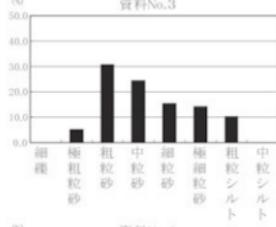
資料No.1



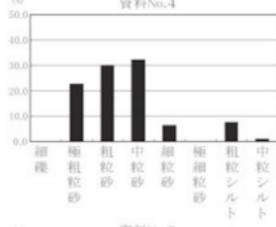
資料No.2



資料No.3



資料No.4



資料No.5

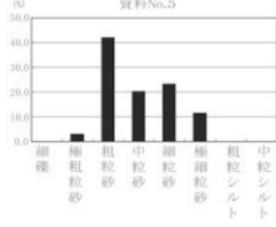


図4-1-2(1) 胎土中の砂の粒徑組成

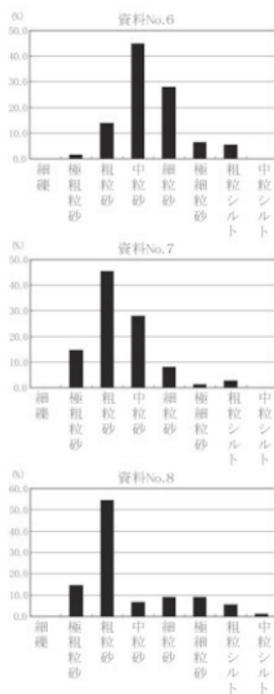
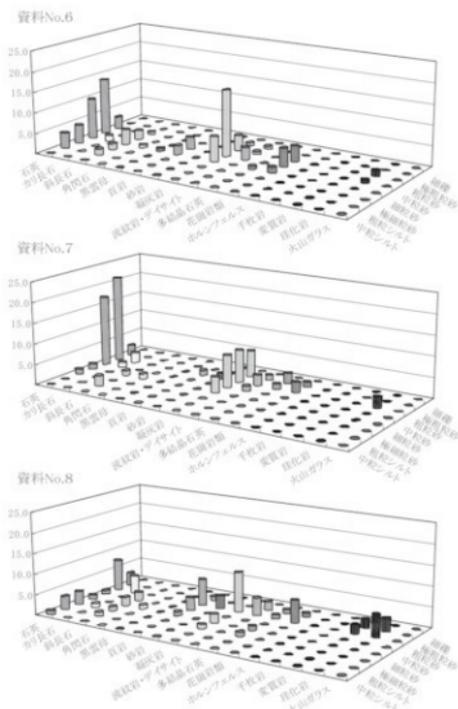


図4-1-1(2) 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

図4-1-2(2) 胎土中の砂の粒径組成

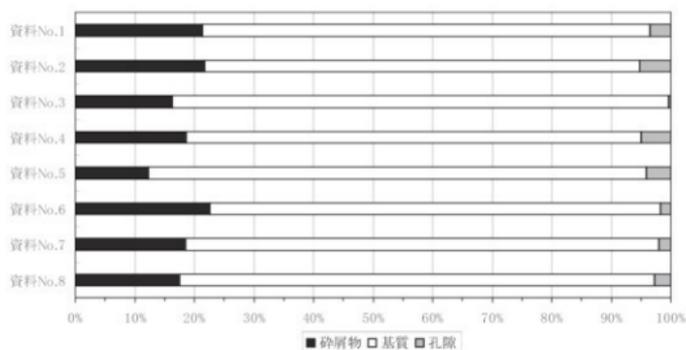
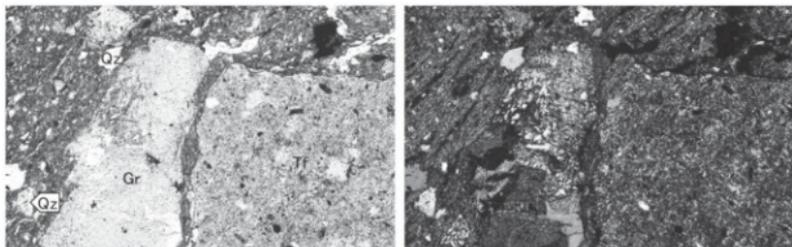
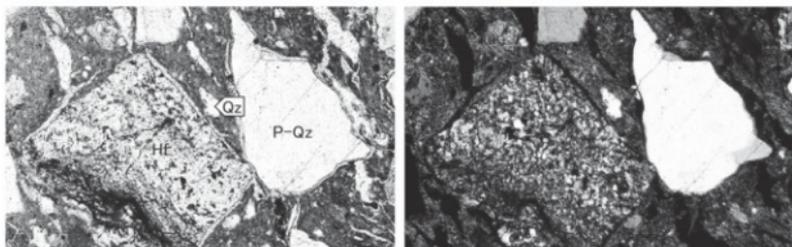


図4-1-3 砕屑物・基質・孔隙の割合

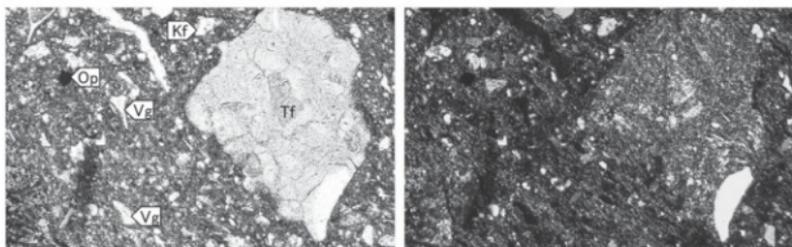
図4-1-4 胎土薄片(1)



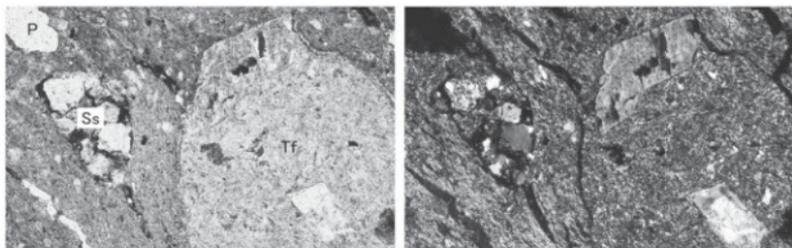
1. 資料No.1(報告No.6 縄文土器)



2. 資料No.2(報告No.8 縄文土器)



3. 資料No.3(報告No.13 縄文土器)



4. 資料No.4(報告No.23 縄文土器)

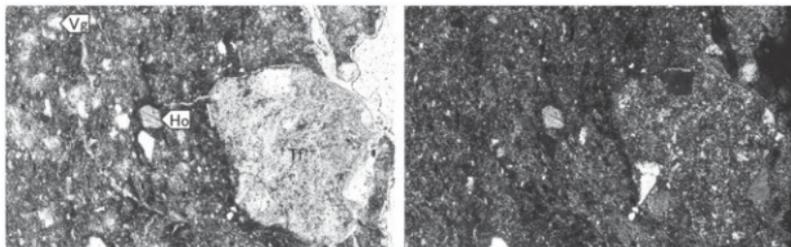
Qz:石英, Kf:カリ長石, Op:不透明鉱物, Ss:砂岩, Tf:凝灰岩, P-Qz:多結晶石英,

Gr:花崗岩, Hf:ホルンフェルス, Vg:火山ガラス, P:孔隙,

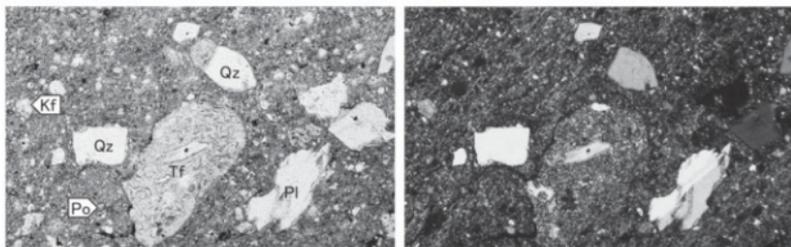
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

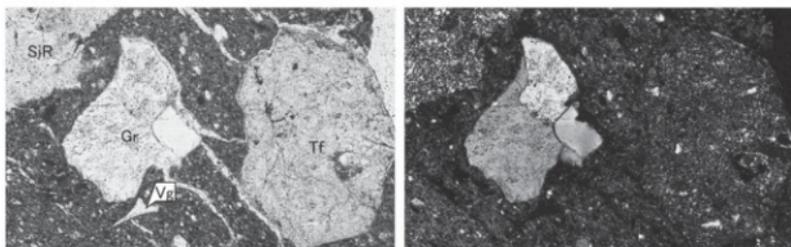
図4-1-5 胎土薄片(2)



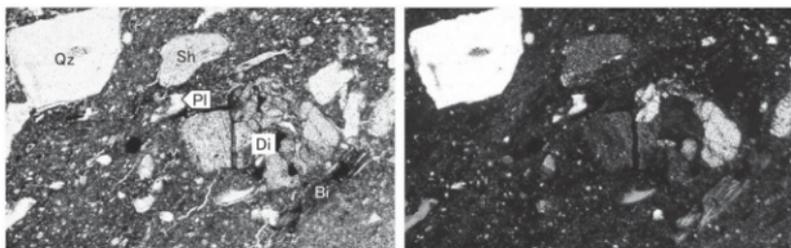
5 資料No.5(報告No.21 縄文土器)



6 資料No.6(報告No.15 縄文土器)



7 資料No.7(報告No.1 縄文土器)



8 資料No.8(報告No.4 縄文土器)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Hd:角閃石, Bi:黒雲母, Sh:頁岩, Tf:凝灰岩,
Gr:花崗岩, Di:閃緑岩, SiR:珪化岩, Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第2節 竹万山田遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

はじめに

赤穂郡上郡町竹万字口山田に所在する竹万山田遺跡は、山田川と安室川の合流点に立地し、両河川の氾濫によって供給された礫および礫面上の微起伏を埋積した洪水砂の直上から遺構が主に検出されている。本遺跡より出土した縄文時代後期のサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は竹万山田遺跡より出土したサヌカイト製のスクレイパー2点である(表4-2-1)。石器は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を用い、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 2) $Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 3) $Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$
- 4) $\log(Fe\text{強度} / K\text{強度})$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log(Fe\text{強度}/K\text{強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料も、採取原石を割って新鮮面を表出させた上で産地推定対象の石器と同様の条件で測定した。

なお、分析装置の更新により、筆者が以前使用していた装置よりもはるかに高計数率での測定が可能となったため、以前よりも精度が非常に良くなった。その結果、従来分離しきれていなかった判別群の細分が可能となり、旧国分台1としていた判別群を国分台1、国分台3、蓮光寺に、旧金山としていた判別群を金山1、金山2に分割して新たに設定した。表2に各原石採取地とそれぞれの試料点数、旧判別群名を示す。

表4-2-1 分析対象一覧

分析No.	報告No.	種類
1	41	スクレイパー
2	40	スクレイパー

表 4-2-2 原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地（試料点数）	旧判別群名
二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）	
讃岐	国分台 1		旧国分台 1
	国分台 2	自衛隊演習場付近（5）、神谷神社前（13）、	
	国分台 3	高産霊神社谷（12）、国分台下みかん畑（5）	旧国分台 1
	蓮光寺	蓮光寺（15）	
	赤子谷・法印谷	赤子谷第 1 地点（5）、赤子谷第 2 地点（5）、法印谷（10）	
	金山 1		旧金山
	金山 2	北峰道路脇（10）、金山南麓（10）	
	城山	城山南側（5）、城山北側（5）	
	藤山・輝山	藤山（5）、輝山（5）	
	双子山	双子山南麓（10）	

3 分析結果

表 4-2-3 に石器の測定値および算出された指標値を、図 4-2-1 と図 4-2-2 に、サスカイト原石の判別図と石器をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定の結果、両者とも金山 1 の範囲にプロットされた。表 4-2-3 に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないため、他の産地の可能性が無いとは言いきれないが、今回の試料は少なくとも判別図の一致しなかった産地のサスカイトでないといえる。

表 4-2-3 分析値および産地推定結果

分析 No.	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 比率	Mn*100 Fe	Sr 比率	log Fe/K	判別群	エリア	分析 No.
1	206.7	191.2	8017.9	487.7	1267.5	255.9	1496.5	13.90	2.38	36.14	1.59	金山 1	讃岐	1
2	216.2	196.3	8178.4	522.7	1353.7	272.1	1610.0	13.91	2.40	36.02	1.58	金山 1	讃岐	2

4 終わりに

竹万山田遺跡より出土したサスカイト製スクレイパー 2 点について、蛍光 X 線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、いずれも讃岐地方産の可能性が高いと推定された。

引用・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定、かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」：511-517、かながわ考古学財団。

第V章 まとめ

縄文時代後期及び平安時代後期の遺構・遺物を中心に検出できた。

今回の調査区は全体として遺構の密度が薄く、遺跡の本体からはやや離れた所にあると推定される。

但し、縄文時代の流路から出土する土器は縄文時代後期初頭の四ッ池式および芥川式に属するで、完形に復元できるものはないが、極至近距離から流されてきたか、或いは当地点において流路に廃棄された可能性の高いものである。県道下もしくはその西側或いは西南側に縄文時代後期の遺跡が存在する可能性は非常に高いといえる。

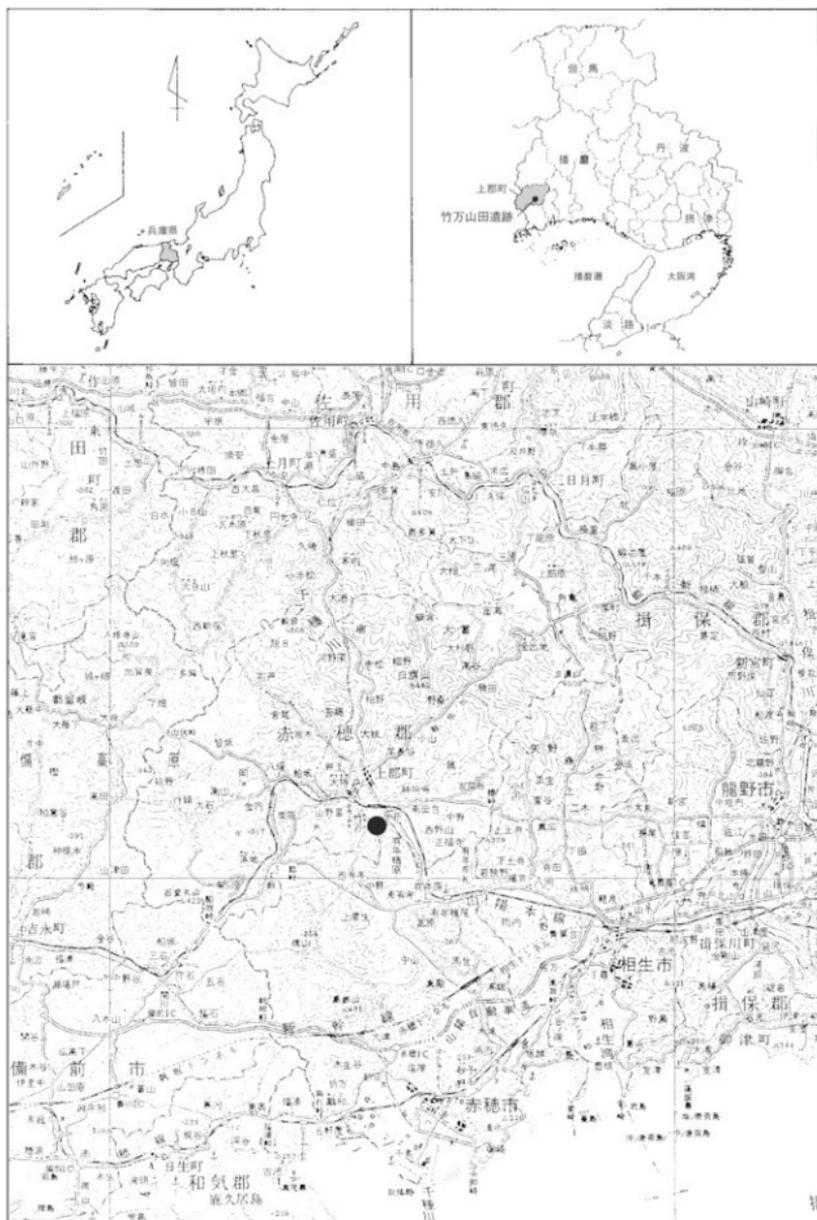
出土した縄文土器8点について、胎土分析を試みた。肉眼観察により判別した在地（遺跡周辺の粘土を用いて作成されたものと推定）と、搬入（遺跡外からの持ち込みと推定）の各4点ずつの分析である。その結果、在地と推定したものと搬入と推定したものが同様の分析結果（F5類）となったことから、搬入と推定したものの多くは在地の可能性があり、この遺跡で出土した土器の多くは、遺跡周辺で採取された粘土による製作の可能性が高い。

また、縄文時代に属すると考えたサヌカイト製の石器について、原石の産地推定を実施した。その結果、分析対象とした2点とも香川県金山産の可能性が高いとされ、石器石材については交易等により、搬入・入手されたものと言える。

なお、少量の弥生時代中期の土器が出土しており、近辺には同時期の遺跡も存在する可能性がある。

検出された柱穴及び土坑は当地点に中世を前後する小規模な集落が存在したことを示唆するが、今回、建物の復元ができなかったことから今後の課題となった。特に、土坑SX01はその形状から中世の屋敷墓の可能性があり、その点からも今後の周辺での調査に注意を払う必要がある。

圖 版

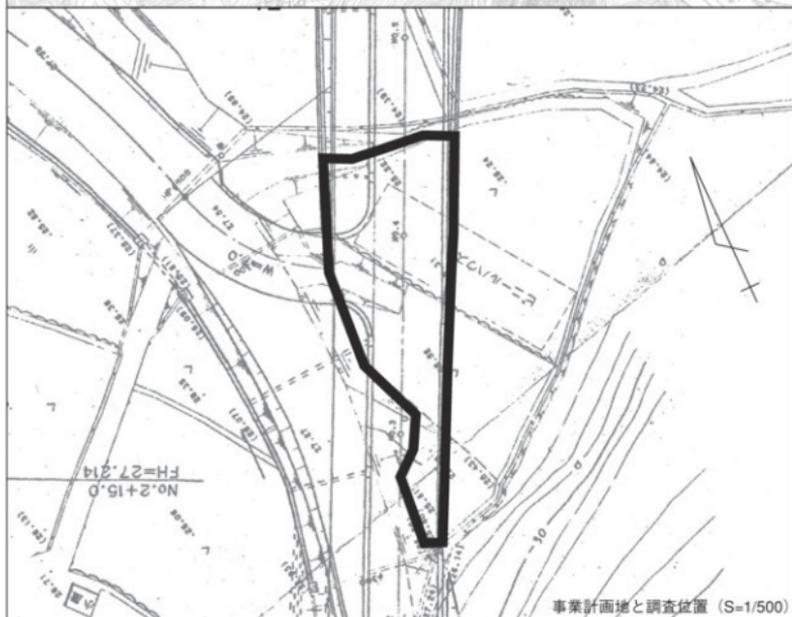
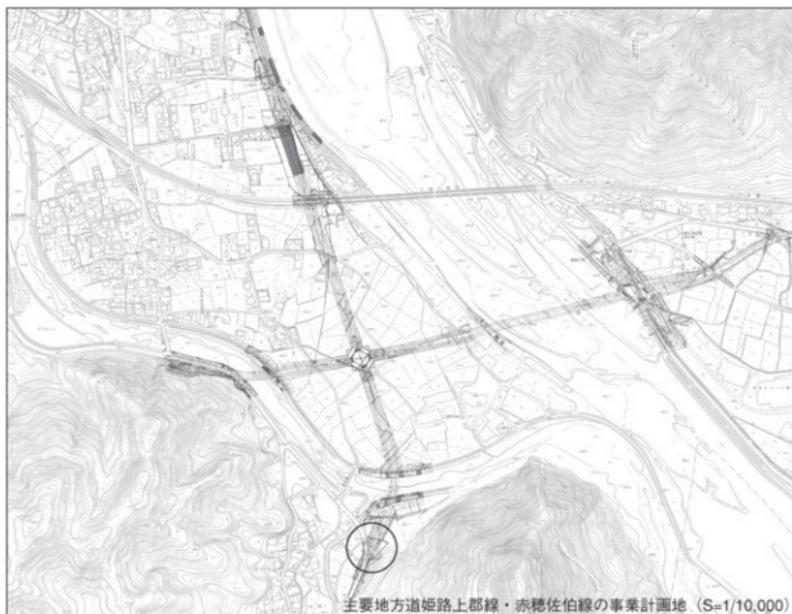


兵庫県・上郡町・竹万山田遺跡の位置

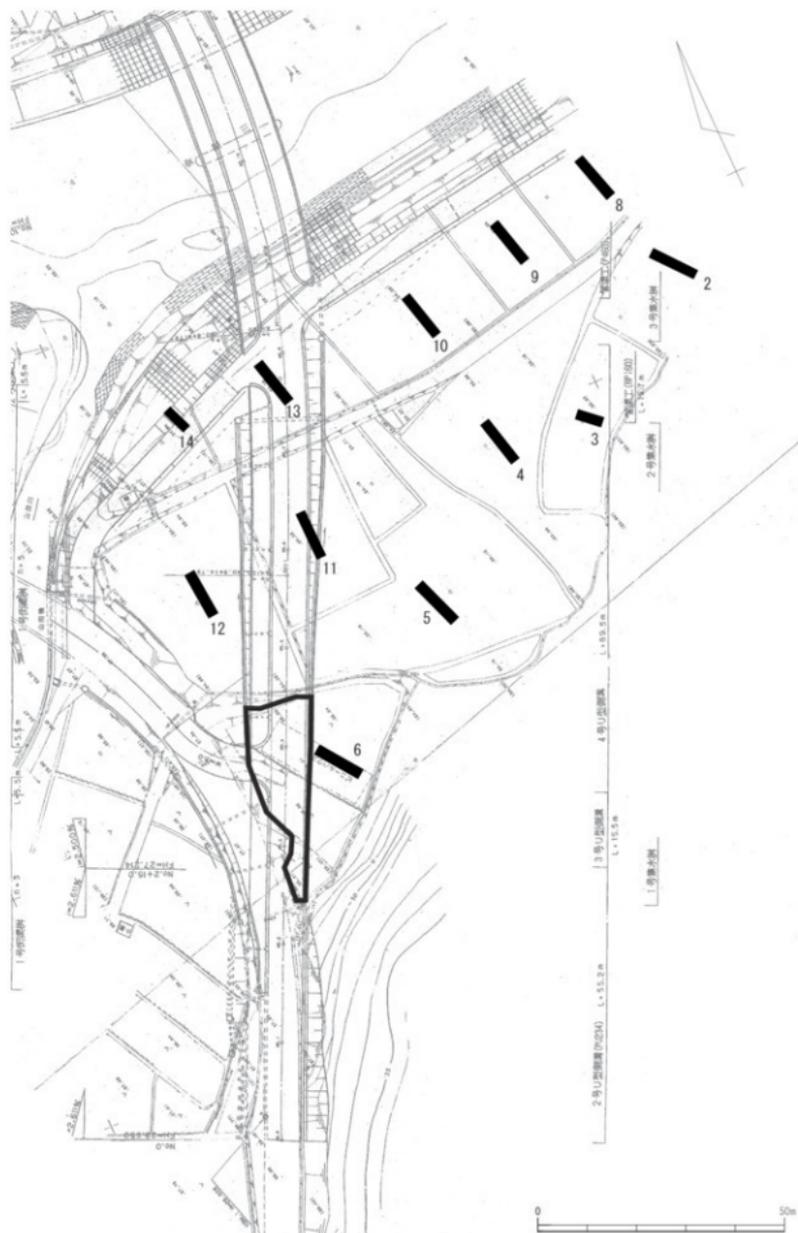


番号	遺跡の名称	時代	種類	番号	遺跡の名称	時代	種類	番号	遺跡の名称	時代	種類
1	岩崎遺跡	中世	城郭	59	山形1号墳-10号墳	古墳	古墳	56	赤池遺跡	中世	版倉庫
2	寺尾江古遺跡	中世・中世	城郭	60	山形2号墳	古墳	古墳	57	山形山道	古墳	古墳
3	岩木遺跡	中世	版倉庫	31	赤池野原第1号墳-3号墳	古墳	古墳	58	野田遺跡	中世	版倉庫
4	藤田1号墳-4号墳	古墳	古墳	32	赤池1号墳-2号墳	古墳	古墳	59	野田山道	古墳	古墳
5	大塚遺跡	中世	城郭	33	赤池遺跡	中世	城	60	上柳ノ又溝遺跡	中世	版倉庫・版倉庫
6	藤田2号墳	古墳	古墳	34	藤田1号墳-2号墳	古墳	古墳	61	上柳山道	中世	版倉庫
7	赤池谷古遺跡	古墳	古墳	35	赤池3号墳-13号墳	古墳	古墳	62	精谷山道	中世	墳墓
8	赤池山道	中世	版倉庫	36	高尾原版倉庫	中世	版倉庫	63	赤池山道-2号墳	古墳	古墳
9	赤池山道	中世	版倉庫	37	高尾原反坪遺跡	中世	版倉庫	64	藤田山道-3号墳	古墳	古墳
10	藤田山道	中世	版倉庫	38	藤田第2号	中世	版倉庫	65	有年山道・田中遺跡	中世	版倉庫・墳墓
11	上柳ノ又溝遺跡	中世	版倉庫	39	藤田遺跡	中世	版倉庫	66	有年山道・田中1号・2号墳注基	中世	墳墓
12	志野野小字校跡遺跡	古墳	版倉庫	40	新井山道	中世	版倉庫	67	赤池山道	中世	版倉庫
13-14	山形野原遺跡	中世	版倉庫	41	新井山道	古墳	古墳	68	木井谷山道-13号墳	古墳	古墳
15	赤池山道	中世	版倉庫	42	赤池山道	中世	版倉庫	69	有年山道・北山道	中世	版倉庫
16	藤田山道	古墳	古墳	43	藤田山道	古墳	古墳	70	有年山道・又ノ又山道	中世	版倉庫
17	赤池山道	古墳	古墳	44	神子山道	中世	版倉庫	71	有年山道・赤池山道	中世	版倉庫
18	赤池山道	中世	版倉庫	45	中山山道	古墳	古墳	72	有年山道・赤池山道	中世	版倉庫
19	赤池山道	中世	版倉庫	46	中山山道	古墳	古墳	73	有年山道・長尾山道	中世	版倉庫・墳墓
20	赤池山道	中世	版倉庫	47	赤池山道	古墳	古墳	74	有年山道・赤池山道	中世	版倉庫
21	赤池山道	中世	版倉庫	48	赤池山道	古墳	古墳	75	有年山道・赤池山道	中世	版倉庫
22	竹乃山道	中世	版倉庫	49	赤池山道	中世	版倉庫	76	有年山道・赤池山道	中世	版倉庫
23	赤池山道	古墳	古墳	50	赤池山道	中世	版倉庫	77	赤池山道	古墳	古墳
24	大井山道-4号墳	古墳	古墳	51	高尾原山道	中世	版倉庫	78	赤池山道	古墳	古墳
25	赤池山道	古墳	版倉庫	52	高尾原山道	中世	版倉庫	79	赤池山道・赤池山道	中世	版倉庫
26	大井山道-20号墳	古墳	古墳	53	高尾原山道	中世	版倉庫	80	赤池山道	中世	版倉庫
27	赤池山道-12号墳	古墳	古墳	54	赤池山道	古墳	古墳	81	赤池山道	古墳	古墳
28	赤池山道-8号墳	古墳	古墳	55	赤池山道	古墳	古墳				

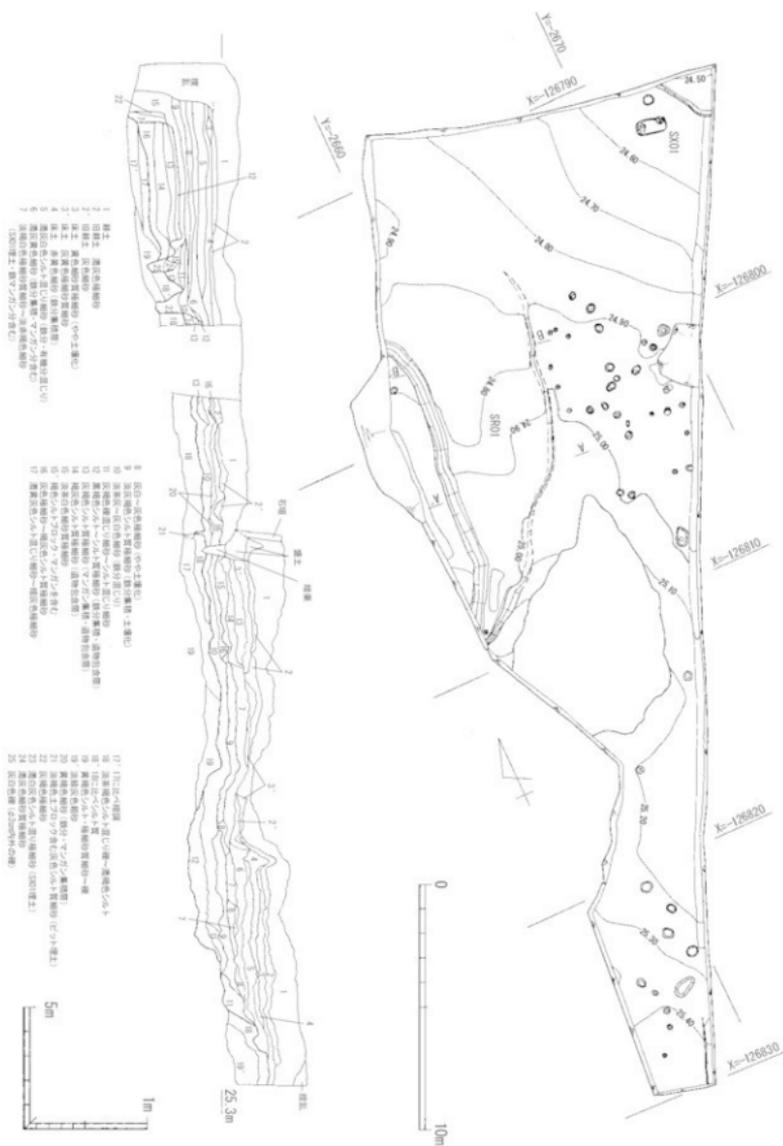
竹乃山田遺跡と周辺の遺跡



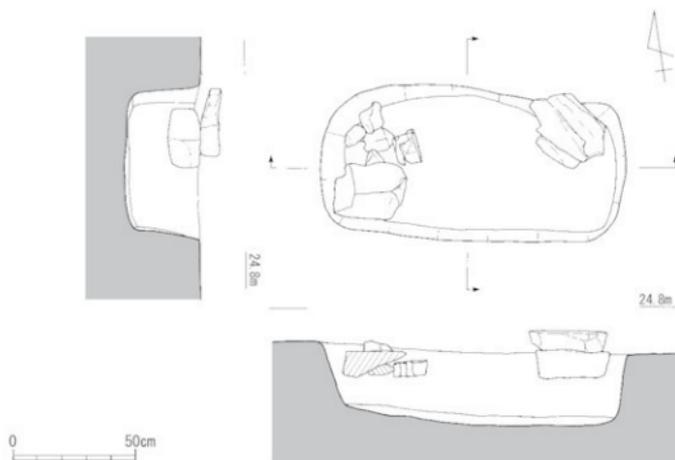
事業計画地と調査位置



確認調査トレンチ配置図



遺構全体図・東側壁面断面図



SX01 平面・断面図



(SR01 A断面土層)

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 汚れた茶灰色細砂～極細砂 | 5 鉄分集積 |
| 2 汚れた灰茶色細砂 (砂粒粗・マンガン含む) | 6 褐色砂礫 (5層との間に特に鉄分・マンガン集積層) |
| 3 淡灰色中細砂 (シルト含む) | 7 淡灰色中細砂 |
| 4 灰色～淡黄茶色中砂 | 8 新しい流れ |

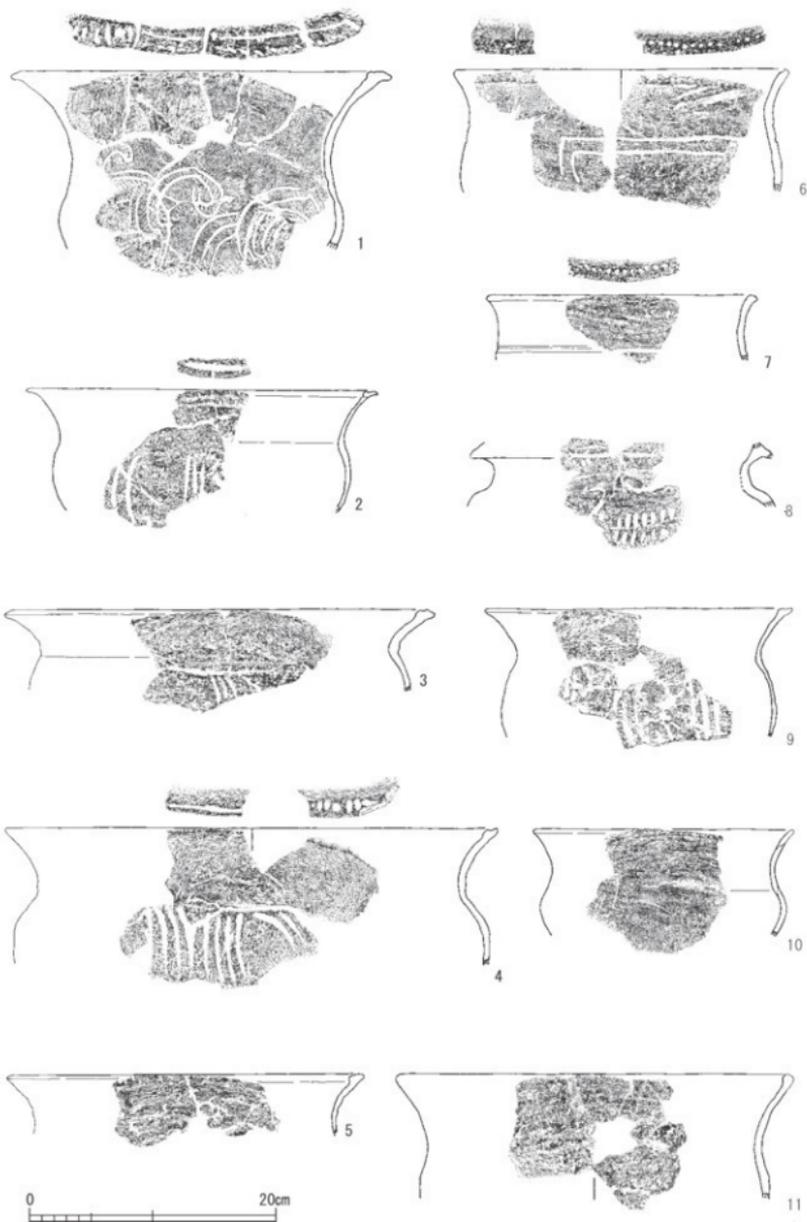


(SR01 B断面土層)

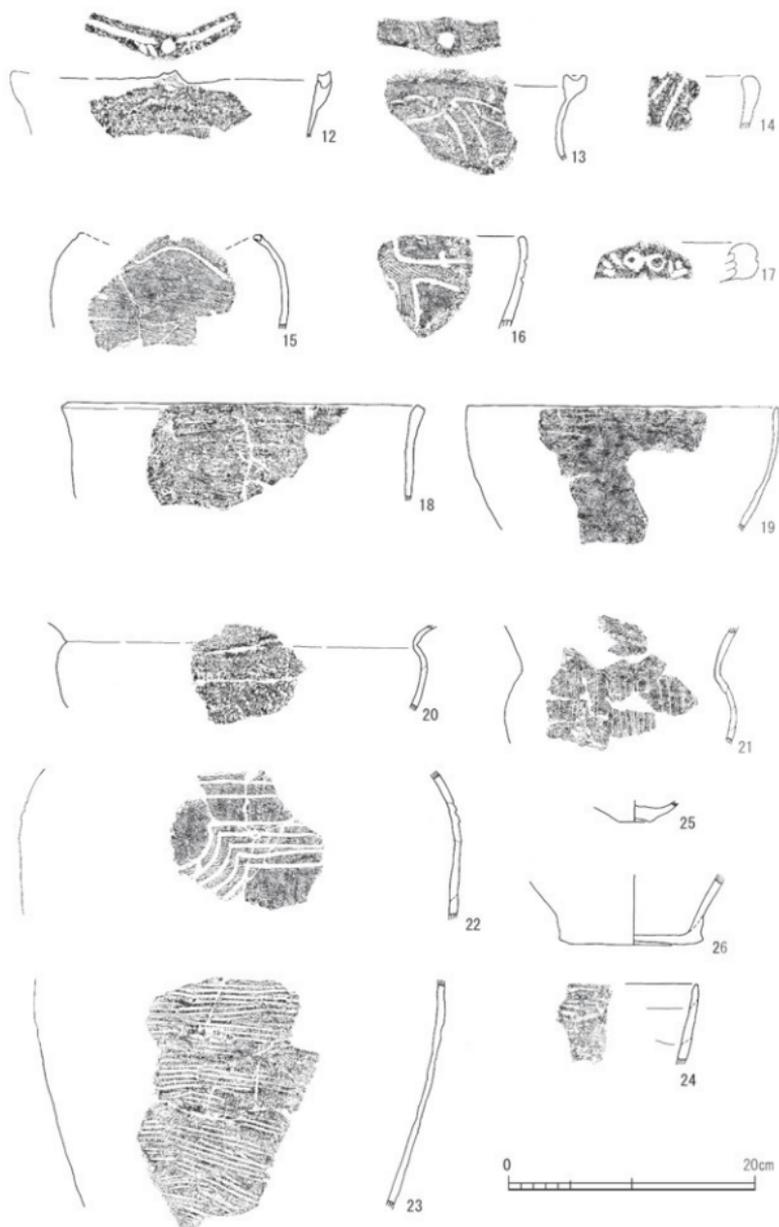
- | | |
|--------------------------------------|----------------------------|
| 1 褐灰～鉄分入る黄灰色細砂 (コブシ大礫含む) | 6 黄色中砂 (鉄分集積) |
| 1' 濡った淡褐灰色中細砂 (シルト含む、礫多し、基本的には1と同一層) | 7 新しい流れ |
| 2 黄灰～淡茶灰色中砂 (マンガン・シルト・有機分若干含む、縄文多し) | 8 濁黄灰色細砂～極細砂 (褐色シルトブロック含む) |
| 3 濡った淡褐灰色中砂 (シルト・礫多く含む) | 9 灰色中砂 (新しい流れか?) |
| 4 褐色礫層 | 10 黄灰色中砂 (新しい流れ) |
| 5 灰色粗砂 | 11 灰黄色中～粗砂 |

SR01 断面図

遺構図・断面図



縄文時代の遺物 1

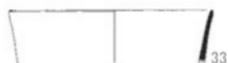
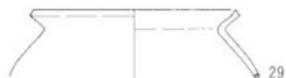


縄文時代の遺物 2

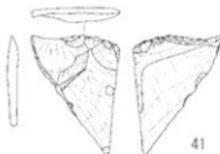
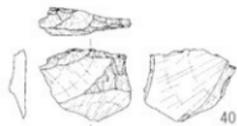
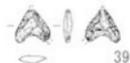
SX01 出土土器



包含層出土土器



縄文時代の石器



写真図版



航空写真（上が北）



調査区遠景（北西から）



調査区遠景（北から）



航空写真（上が北）



調査区全景（北から）



調査区全景（北西から）



調査区全景（南南東から）



調査区全景（北から）



調査区全景 縄文流路周辺

写真図版 6



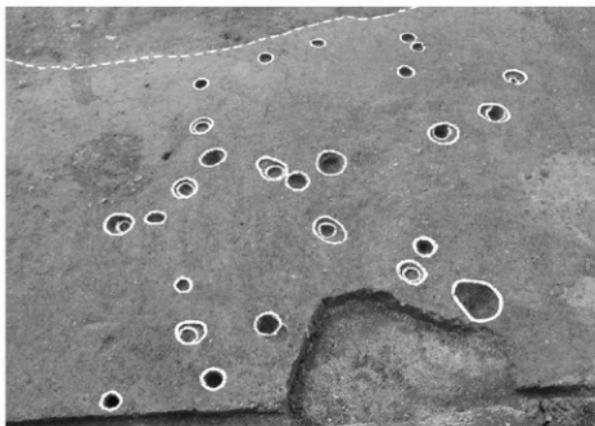
中央の柱穴群（西から）



南端の柱穴（北から）



柱穴群（南南西から）



柱穴群 近接（東から）

SK01



SK01 堆積状況 (西から)



SK01 完掘状況 (西から)





縄文時代流路（南から）



SR01 堆積状況 北断面



SR01 堆積状況 南断面



SR01 縄文土器出土状況 1



SR01 縄文土器出土状況 2



SR01 縄文土器出土状況 3



調査区東壁 南半



調査区東壁 中央の状況



調査区東壁 北半の状況



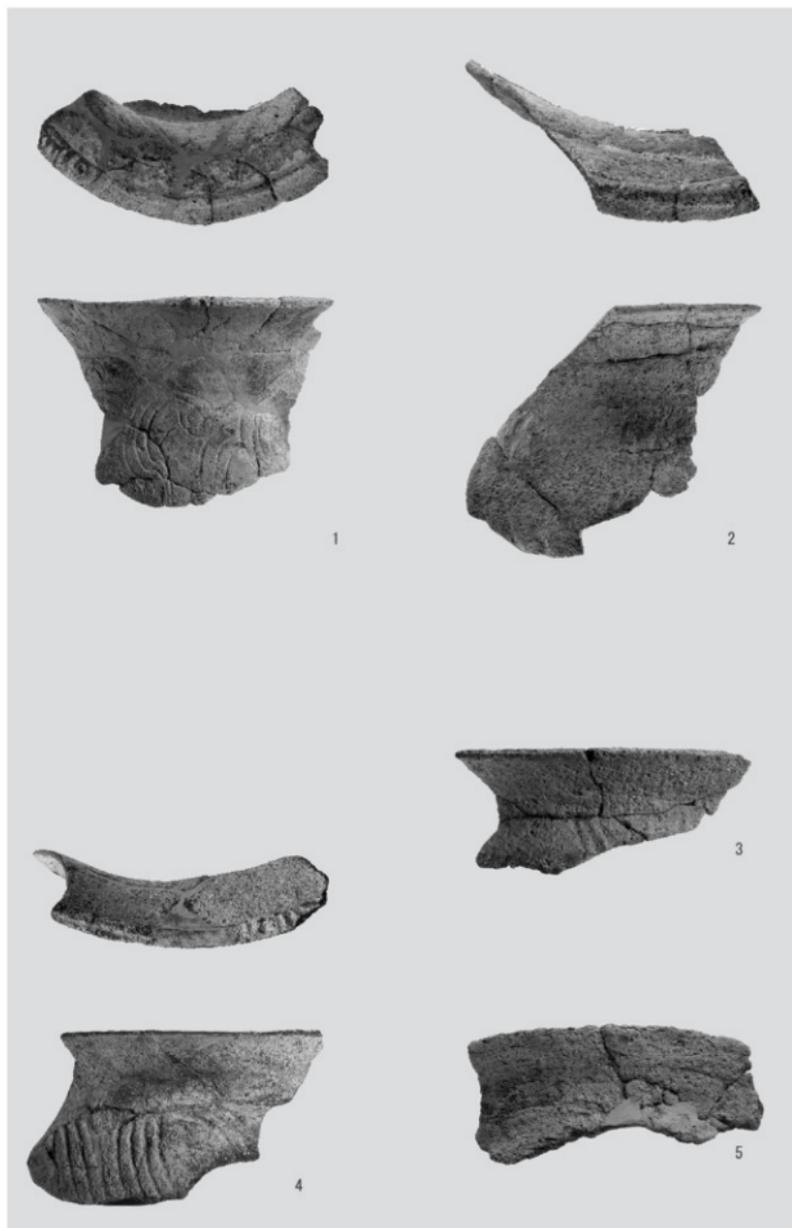
調査前の状況（北から）



機械掘削状況



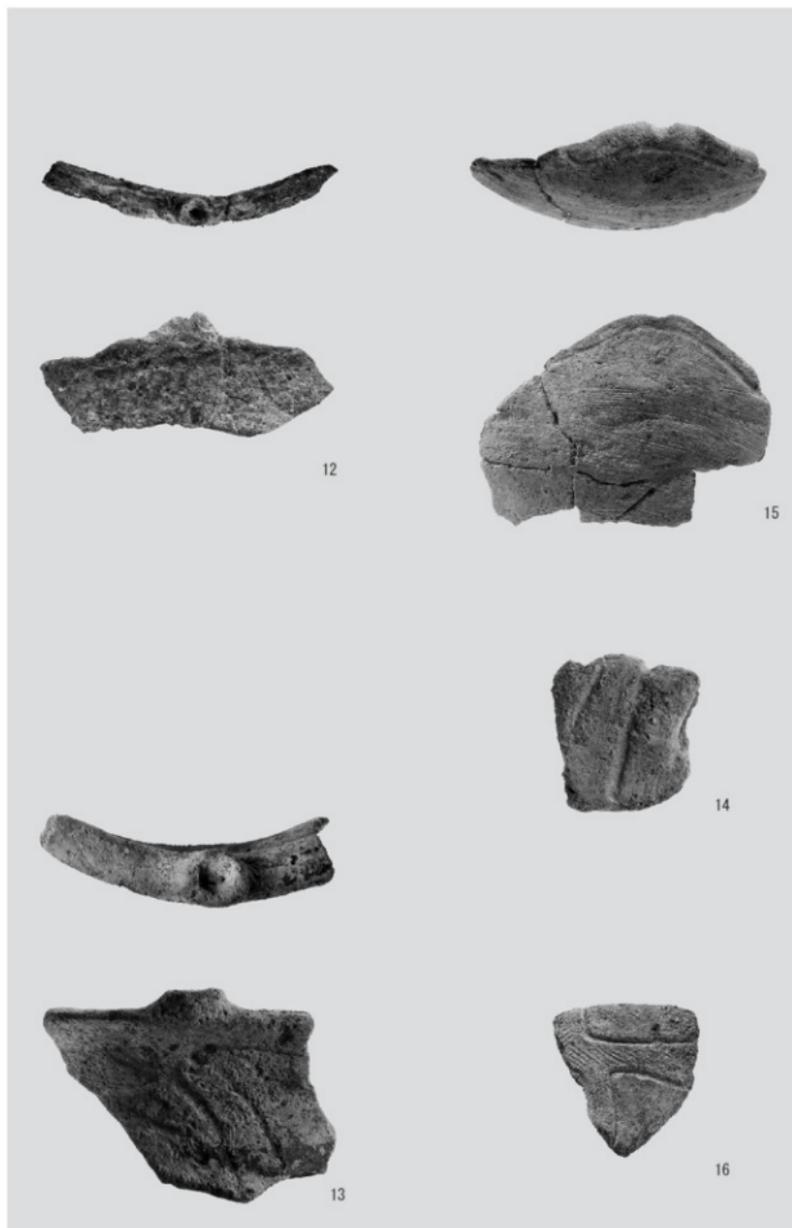
遺構精査状況

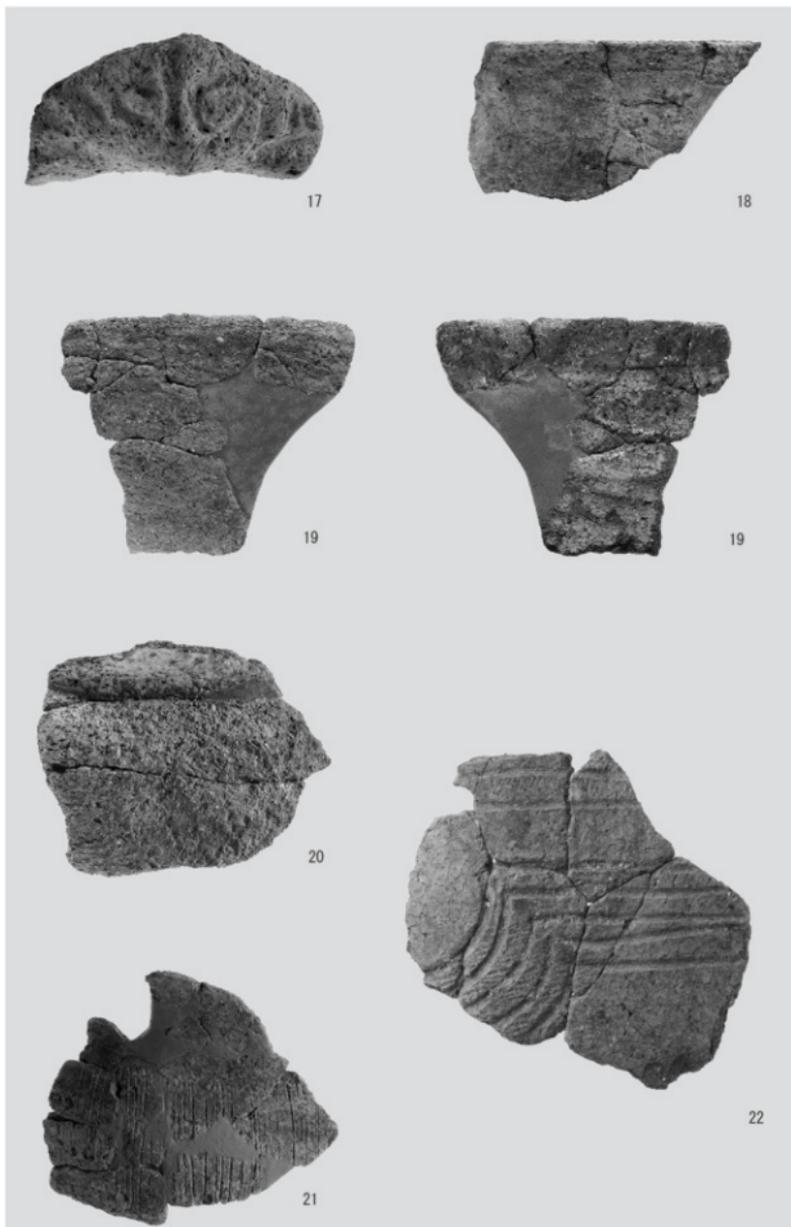


縄文時代の遺物 1

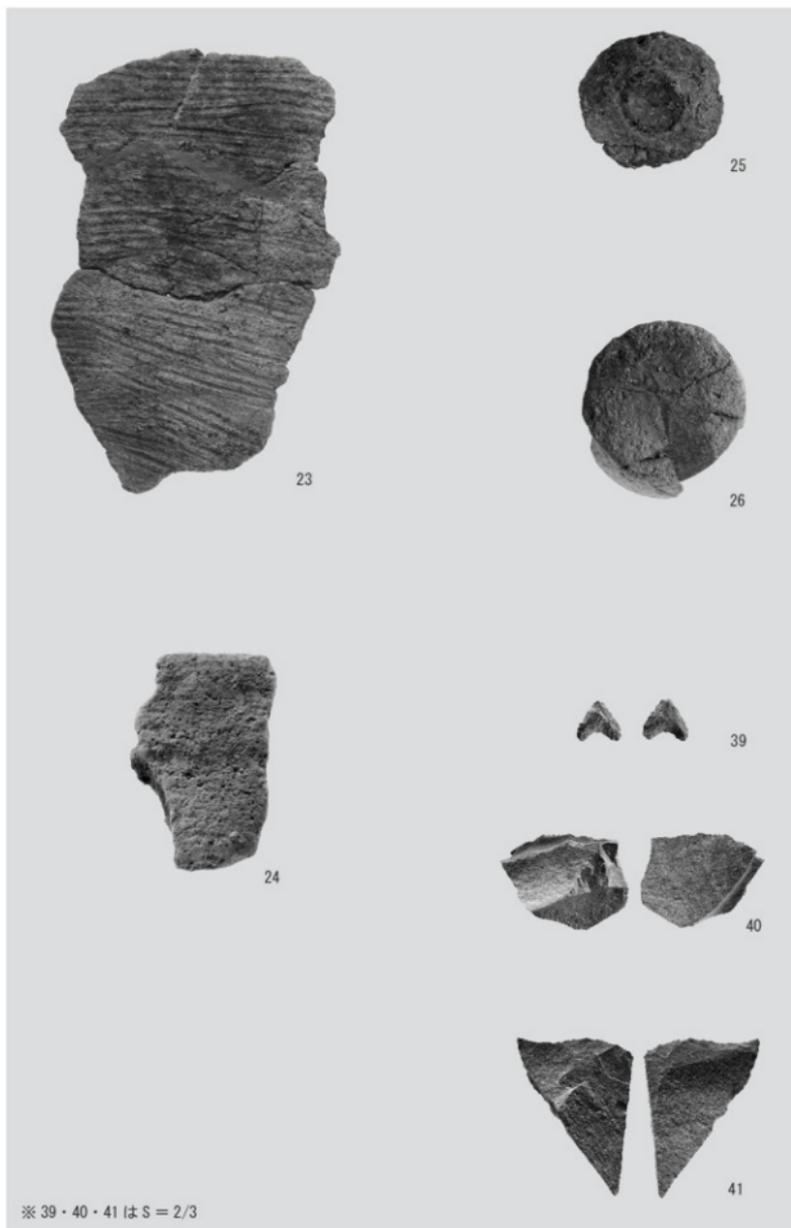


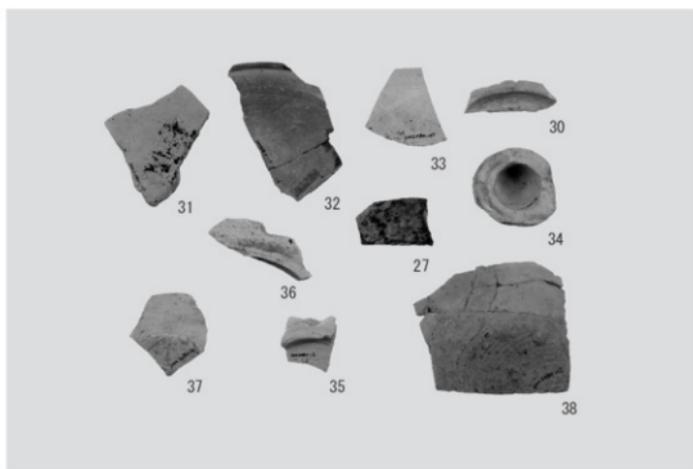
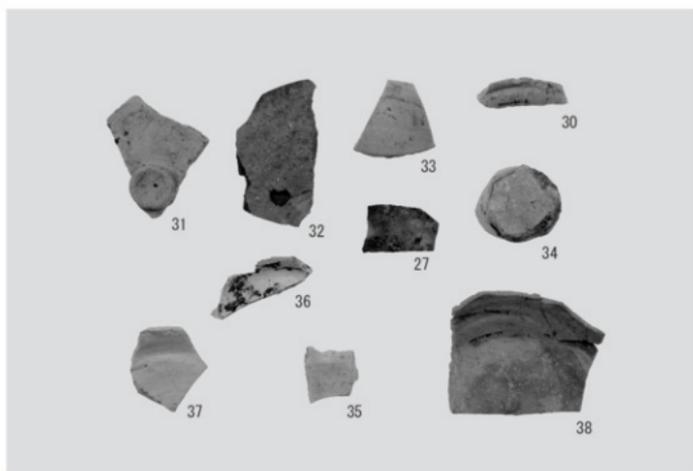
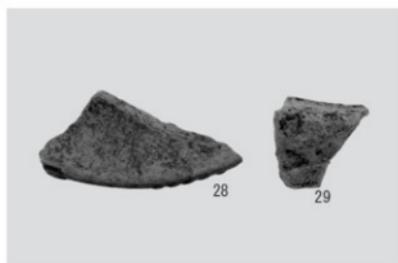
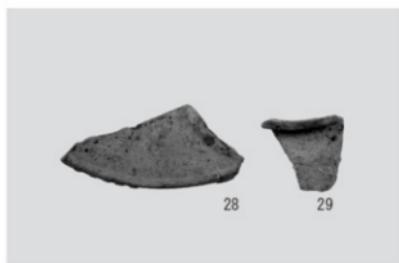
縄文時代の遺物 2





縄文時代の遺物 4





報告書抄録

よみがな	ちくまやまだいせき							
書名	竹万山田遺跡							
副書名	(主) 赤穂佐伯線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第417冊							
編著者名	西口圭介・山本誠							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 加古郡播磨町大中1-1-1 Tel 079-437-5589							
発行年月日	西暦2012年(平成24年)3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
ちくまやまだいせき 竹万山田遺跡	ひょうごけん あこうぐんか みごおりちよ うちくま 兵庫県赤穂郡 上郡町竹万	28481	2001205	34度51分25秒	134度21分46秒	確認調査 20011004 ～ 20011205	242㎡	(主) 赤穂佐 伯線道路改良 事業
			2002080			本発掘調査 20020531 ～ 20020627		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ちくまやまだいせき 竹万山田遺跡	集落跡	縄文時代	流路(SR01)	縄文土器	縄文時代後期初頭の 四ツ池式および芥川式			
		平安時代	土坑(SX01)	須恵器				

赤穂郡上部町

兵庫県文化財調査報告 第417冊

竹万山田遺跡

— (主) 赤穂佐伯線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —
平成24(2012)年3月26日発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
Tel. 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 富士高速印刷株式会社
